

大正期における「生涯的教育」の模索 —今澤慈海の図書館論を視点として—

山 梨 あ や
(慶應義塾大学大学院生)

はじめに

本稿は、1915（大正4）年から1931（昭和6）年まで東京市立図書館の館頭であった今澤慈海（1882-1968年）が、図書館を「生涯的教育」機関とする図書館論を形成したことに注目し、この論において「生涯的教育」がどのように模索されていたのかを明らかにすることを目的としている。

今澤の名は、「日本の図書館界における偉大な先覚者⁽¹⁾」、「児童図書館の父⁽²⁾」として図書館史の中でよく知られている。今澤の図書館論は「大正期の自由主義的な思想を背景」として「自らの実行や経験を通し、日本の実情を考えに入れつつ児童図書館や児童図書についての考えを築き上げ」たものであり、児童図書館員の専門性や、児童図書館員に対する教育についての面が捕らえ切れていないながらも、「全体として（中略）現代にあっても基本的には立派に通用する普遍性を持っている」として、図書館史において高く評価されてきた⁽³⁾。今澤に対する高い評価は、今澤の館頭在任期間をもって市立図書館の「発展期⁽⁴⁾」「黄金期⁽⁵⁾」とし、退任とともに「不振時代⁽⁶⁾」を迎えたとする時代区分にも反映されているといえよう。

今澤が東京市立図書館館頭として活躍したのは、大正デモクラシーを背景

に社会教育や社会政策が注目され、教育への関心が学校教育に限定されなくなった時代である。ことに、第一次大戦後の「教育改造」では学校教育、特に義務教育の限界性が認識されていた。このことは、実現はされなかったものの、臨時教育会議において義務教育年限の延長が審議されたことや、1921年に文部省に社会教育課が設置されたことに反映されているといえよう。また、この時期、民間においても知識人を中心に趣味や娯楽を対象とした教育が構想されている。このような意味において大正期は「教育拡充」の時代であったといえる。

また新教育運動は「公教育に支配的な画一的・強制的教育方法を排し、子どもの個性や自発性を重視する⁽⁷⁾」要求に基づいて展開されたが、これも「教育拡充」の流れの中に位置づくものである。

その一方、大正期の教育については「総じて（中略）天皇制教育の目的批判には及ばず教育方法上の改革に主眼が置かれ⁽⁸⁾」、教育方法の改革に関心が集中するあまり、何を目的に教育方法の改革を行うのが明確ではないという側面も指摘されてきた。

このことから、大正期には、学校教育以外の教育への着目という教育の対象の面においても、被教育者の自発性への注目という教育の質的な面においても「教育の拡充」が見られる一方、何を目的として教育を拡充するのが明確に示されないという問題が表面化したといえよう。

したがって、今澤の図書館論に即して「生涯的教育」がどのように模索されていたのかを検討することは、以上に示した大正期における教育の問題を具体的に把握する一助となると考えられる。ここに、大正期に展開された今澤の図書館論を検討する意義がある。

本稿では以上のような問題意識に基づき、「教育拡充」の時代にあって今澤が「生涯的教育」をどのように模索していたのかを明らかにしていく。

1. 「生涯的教育」論の形成

1) 今澤と東京市立図書館

今澤は1907（明治40）年東京帝国大学文科大学哲学倫理学科を卒業し、

1908（明治41）年に東京市に就職する。その後1913（大正2）年より主事補として東京市立日比谷図書館に勤務し、1915（大正4）年には全東京市立図書館を統括する館頭に就任し、1931（昭和6）年に東京市を退職するまで東京市立図書館の発展に貢献した。この他今澤は日本図書館協会会長、理事長を歴任し、文部省図書館員教習所（後に講習所）の開所から1940（昭和15）年まで講師を務めている。1934（昭和9）年より成田に居を移し、成田中学校校長、成田図書館館長を務める他、成田山史および千葉県史編纂にも携わった。今澤は生涯を通じて図書館の発展に尽くした人物といえよう。

今澤が勤務した東京市立図書館は、1908年に東京市立日比谷図書館として誕生した。日比谷図書館は開館当初から非専門的な「通俗図書館」としての性格を貫いていたこと、日露戦後の文化産業の成立とその享受層の拡大、尾崎行雄や後藤新平ら図書館に理解のある市長の存在などによって順調に発展し、1921（大正10）年には全20館から成る図書館網を形成するに至った。

市立図書館の制度面に目を転ずれば、今澤が主事に就任した翌1915年に「中央図書館制」が導入され、日比谷図書館館頭が全東京市立図書館を統括し、予算配分や人員配置などを含む図書館運営を行うことが認められるようになった。今澤はこの制度の下、図書館網の整備、閲覧料の値下げや無料化、児童奉仕の充実、館報『市立図書館と其事業』（1921年より発行、以下『其事業』）の発行など、活発な活動を展開している。1931年に東京市の職制が改正されると市立図書館はすべて市教育局長の監督下に置かれることとなった。今澤はこれを機に東京市を退職する。図書館史では今澤の退任後は市立図書館の活動が教化的なものとなったと評価してきた⁹⁾。

今澤が日比谷図書館に勤務した契機は、「日英文庫」の分類整理を委嘱されたことにある。したがって今澤には図書館学を体系的に学んだ経験はなく、図書館勤務の過程で、内外の図書館関連の文献からの情報や図書館での経験を基に徐々に図書館を「生涯的教育」機関とする論を形成していった。これらの図書館論は『図書館雑誌』や館報『其事業』誌上に発表され、『図書館経営の理論及実際』（1926年、以下『理論及実際』）において体系化される。それでは、今澤の図書館論がどのように形成され、「生涯的教育」がどのように構想されていたのかを見ていくことにしよう。

2) 「生涯的教育」論の形成

今澤の最初の図書館論は『図書館小識』(1915年)に見出される。今澤は図書館を「収容年限無く、其老幼男女を別つこと無く、且個人の力を以ては到底蒐集し能はざる内外古今の図書を備付くるを以て、彼等一たび学校を去り教師に遠りたる後と雖も、(中略)不知不識の間に精神を修養し、知見を拡充し、品性を高め、好尚を上せ、よりて自らよく教育⁽¹⁰⁾」し、「其(引用者注、学校教育)足らざる所を補ひ、其及ばざる所を達せしめて、以て一国々民の教育を完成する⁽¹¹⁾」役割を担う教育機関と位置づけている。その上で図書館の目的は「一国民の小学校に於て始められたる教育を、終身継続し得る機会を成年者に与へ、以て教育の効果を發揮せしめんとする⁽¹²⁾」にあると総括した。この論で注目されるのは、図書館が学校教育と同じく一個の教育機関であるとしていること、図書館を利用することで教育を「終身継続」する機会を「成年者」に与えようとする姿勢である。ここに、図書館が学校教育と連携することによって教育が完成するという、後の今澤の「生涯的教育」論の原型を見出すことができよう。

今澤が初めて「生涯的教育」という語を用いて図書館の果たすべき役割を論じたのは「公共図書館の使命と其達成」(1920年)においてである。ここで今澤は「人格活動は生涯的である」から「広義的教育修養も亦生涯的」でなければならないこと、また人格は「萬人萬具」であるからその教育は「部分的、差別的、階級的」ではなく「全般的、普遍的、平等的」、「経済的」な形式によって、「出来得る限り自発的能動的」になされなくてはならないとする「生涯的教育」の枠組みを明確に示した⁽¹³⁾。教育を「生涯的」なものとして捉えると、学校教育は「一生に対する教育の発程準備」に過ぎない。そこで今澤は学校教育終了後の人生の「生涯的教育」の有効な手段として「読書」を提示する。もちろん読書は「人生進展の手段の全部」ではないものの、「最重要捷徑」である。こうして「生涯的教育上吾人の望む所は読書力の養成と相待ちて読書の趣味習慣」であり、「人生の教育が生涯的なる以上、此読書も亦生涯的なるべきなり。」という結論が導き出されることとなった⁽¹⁴⁾。このような過程を経て、今澤は公共図書館を「最大多数の為に、其生涯を通じて、最も経済的に内外古今の良書を供給し、彼等をして各自の趣味能力に相応し、自由に閲読利用せしめ、彼等自身をして自発的に教育修養せしめ得る所な

り。」と定義し、公共図書館は「生涯的教育」機関として良書閲読奨励に関する奉仕の任務を担うこととなったのである⁽¹⁵⁾。「生涯的教育」は公共図書館の社会民衆に対する「文化的貢献効果」と位置づけられ、この効果は「各人の自学自修によるが故に一層顕著」になるとして、個人の個性や趣味能力に応じた自発的な学習が重視された⁽¹⁶⁾。

さらに今澤は「生涯的教育」を達成するという観点から、児童に対する働きかけに注目する。なぜなら、「生涯的教育」に不可欠な読書趣味や習慣は「一日にして養はれず、必ず幼少の時より準備せられざるべからざる⁽¹⁷⁾」からである。後に、幼少期からの働きかけの重要性は、「成人教育」の視点からも論じられるようになった。今澤は図書館論を展開した当初から、成人に教育機会を与えることに言及していたが、「生涯的教育」の明確化に伴い、「図書館教育の大部分は成人教育にあるのである⁽¹⁸⁾。」として、成人教育はその主な対象と位置づけられる。しかしながら、今澤は「物の成るはその日に成るのでない」、成人教育の「真の効果」を得るためには、「青年時代、尚遑って幼少年時代からの準備が必要である。」として、成人教育の基礎を形成する観点から幼少期の働きかけの必要性を主張するのである⁽¹⁹⁾。

このように今澤は徐々に図書館を「生涯的教育」機関とする位置づけを明確化していった。その過程で、「生涯的教育」は自発的に行われることが望ましく、図書館はこれに適合する教育機関であること、さらに「生涯的教育」に不可欠な読書趣味習慣を養成するためには幼少期からの働きかけが重要であることを明らかにしている。このことは、「生涯的教育」が幼少期からの連続的な働きかけに立脚するものとして模索されていたことを示しているといえよう。今澤の図書館論は教育を「生涯的」スパンで捉えることを出発点として、図書館の果たすべき役割を模索していることが特徴的である。

それでは、今澤が幼少期にはじまる働きかけをどのように生涯に互って行おうとしていたのかを見ていくことにしよう。

3) 学校と図書館の連絡

すでに指摘したように、今澤は図書館を学校教育の不足を補い、さらにその「及ばざる所を達せしめ」る教育機関であると捉えていた。それでは今澤は学校教育と図書館における教育の違いをどのように考えていたのだろうか。

今澤が指摘した学校教育と「図書館教育」の差異は以下の七項目である⁽²⁰⁾。

- ①学校教育は学習時期に制限があるのに対して図書館教育は制限がない
- ②学校教育は一定の団体を対象とするのに対して図書館教育は一般公衆を対象とし「千客万来」である
- ③学校教育は差別的階級的であるが、図書館教育は平等的非階級的である
- ④学校教育は多くの学資を要するのに対して図書館教育は多くの学資を必要としない
- ⑤学校教育は画一的、被動的注入的であるのに対して図書館教育は非画一的、能動的で自発的である
- ⑥学校教育は全体として「知新に過ぎ」「温故」を欠く傾向があるが、図書館教育は両方を兼ねることが出来る
- ⑦学校教育は無趣味に陥り個性の働きを防ぎ、読書趣味の涵養を欠くが、図書館は趣味の涵養に適し、個性の働きを助長する

しかしながら、今澤は学校と図書館とを対立するものと捉えていたわけではない。今澤によれば、「学校と図書館とは緊密な関係⁽²¹⁾」があり、学校は「将来自ら世に処するに必要な器具⁽²²⁾」、すなわち生きて行く為に最低限必要な基礎を「特殊な感受性の旺盛な短い時期に、人格的強制的訓練と説明との手段」によって「感化力を集注」して授ける⁽²³⁾。その一方、図書館は学校教育で培われた基礎を生涯に互って応用する「資料⁽²⁴⁾」を与え、「束縛と強制」から自由な性質を生かして「学校時代の者には図書館は学校教育と提携して教育を全う」し、「学校の課業と提携して児童の読書を勧誘する」という⁽²⁵⁾。ゆえに、図書館とは単なる「学校教育の継続機関、補助機関⁽²⁶⁾」ではなく、「主として学校教育の終止するところに」その特質を発揮して、学校教育の効果を維持しつつ、「学校に在ると在らざるとに論なく、一般民衆を対象とせる生涯的社会教育機関」として機能する⁽²⁷⁾、一個の独立した教育機関なのであった。

今澤はこのような学校と図書館の性質の違いを活かしつつ、両者を「連絡」させることによって「生涯的教育」を達成しようとしたのである。ここでいう「連絡」とは、学校教育を受けている者には「図書館は学校の課業と提携して児童の読書を勧誘⁽²⁸⁾」し、学校教育を終えた者には「公共図書館の援助を得て終生の教育を継続する⁽²⁹⁾」ことによって生涯に互る教育を行おうとす

るものであった。今澤は、幼少期における学校と図書館との連絡が「生涯的教育」の基礎となる読書力及び読書趣味習慣を養い、学校教育終了後は図書館が引き続き教育機関としての役割を果たすことによって、生涯に亙る教育を行うことが可能になると考えていた。ここで注目されるのは、児童に対する働きかけが常に「生涯的教育」を見据え、生涯に亙る教育の基礎を形成することを目的として論じられていたことである。それでは、今澤はどのようにしてこれを達成しようとしていたのだろうか。この点について児童図書館に関する論考を中心に検討していくことにしよう。

2. 児童図書館論—「生涯的教育」との関連で—

1) 児童図書館論の特徴

今澤は「生涯的教育」の基礎を形成するという観点から、児童に対する働きかけの必要性を主張していた。したがって今澤の児童図書館論は、単なる児童に対する働きかけとしてではなく、常に「生涯的教育」との関連において、また「生涯的教育」の主な対象とされた成人教育を念頭において展開されている。このことから今澤の児童図書館論を検討することは、児童図書館論を視点として、成人教育との関連や「生涯的教育」がどのように模索されていたのかを明らかにする作業となる。

今澤は図書館論を展開した当初から、児童図書館の活動は常に児童の読書趣味の涵養を目的として行わなければならないと主張していた⁽³⁰⁾。たとえば『図書館小識』(1915年)に示された「児童図書館の目的」の第三番目には「幼児より読書の習慣を与へて其趣味の涵養を計り、他日成人たるの後図書館を利用して益自己の修養に資し、以って一般国民の知徳水準を向上せしめんとするの素を成すこと⁽³¹⁾。」が挙げられている。しかしながら、この時点ではなぜ幼少期からの読書趣味の涵養が必要なのか、またなぜ成人した後に図書館を利用しなければならないのかは明らかにされていない。

ところが今澤は図書館を「生涯的教育」機関と位置づける過程を経て、児童図書館を公共図書館に不可欠な要素として捉えるようになる。その論拠としては、公共図書館の蔵書は「教育的要具」であるので老若男女の別なく一

般公衆の為に利用させるべきこと、学校教育は「生涯的教育」に最も必要な読書趣味の養成には手が回らないので、これに関しては児童の時から図書館が行わなければならないこと、の二点が挙げられている⁽³²⁾。

ここでいう「読書趣味」とは「どう云う本をよむべきか」を自分で判断する「鑑賞力」である。「読み書きの稽古」である「読書力」の養成には学校教育がその力を発揮するが、「読書趣味」の養成には図書館が貢献する⁽³³⁾。「読書趣味」を涵養して自分に必要な本を見定める「鑑賞力」を身につけることは、「自分自身によりて生み出されたる内部的動機によりて自分自らを教育⁽³⁴⁾」し、「生涯的教育」を実現するために不可欠であった。「読書趣味」の涵養は「生涯的教育」の原動力となると想定されていたといつてよい。今澤は読書趣味の涵養には幼少期からの働きかけが不可欠であるという観点から、児童図書館論を展開するのである。

今澤は図書館を「生涯的教育」機関と位置づけ、読書趣味が「生涯的教育」の原動力であるとする過程を経て、児童図書館の目的は「生涯的教育」の基礎の形成にあることを明確化していく。『理論及実際』（1926年）に示された「児童図書館の目的」を先に挙げた『図書館小識』（1915年）のそれと比較してみると、かつては第三番目に位置していた「幼児より読書の習慣を与へて其趣味の涵養を計り…」が第一番目に据えられ、さらにその文言も「他日成人の後図書館を利用して（中略）以て生涯的教育を達成し、一般国民の智徳の水準を向上せしむるの素となすこと⁽³⁵⁾（傍点引用者）」となっている。

ここにおいて、児童の読書趣味の涵養と成人後に図書館を利用することが「生涯的教育」の達成という目的の下に結び付けられるようになったといえよう。今澤は図書館を「生涯的教育」機関と位置づける過程を経て、幼少期からの読書趣味の涵養が「生涯的教育」の基礎となること、さらに「生涯的教育」の基礎を形成するには児童図書館が不可欠であることを明確化するのである。

それでは、児童に対する働きかけは、どのように「生涯的教育」へと結びついていくのだろうか。今澤は公共図書館の任務は主として学校教育の終了後に始まると考えていたことから、今澤の関心は、学校教育を終えた人々に対していかにして生涯に互る教育の場を提供するかということにあったといえよう。これは、20年代の「生涯的教育」論の形成を経て、学校教育を終え

た人々、特に児童と成人の中間に位置する「青年⁽³⁶⁾」層を対象とした論の展開という形をとって現れてくることとなる。

2) 青年層への働きかけと図書館における実践

今澤は「十四の春秋を迎えた児童に対し、良き図書を読み且つ楽しむ機会を与へないことは、彼等の基礎的特権を奪ふものであ⁽³⁷⁾」るとして、「児童と成年者との中間にある若い人々に与へる図書」である「中間読物」を用意する必要性を訴える⁽³⁸⁾。「中間読物」とは「児童と成年者との中間にある若い人々に与へる図書」のことであり、「児童が或年齢、学年に達すれば、その人々の知的欲望を満足させる」ために「児童室以外に与へる材料」である⁽³⁹⁾。今澤によれば「よく陶冶された人格からほとぼり出た各種の著述を中心」とした「百般の科学、実務の学」の読物が「青年期」の「乏しき体験と直観とを補ひ、之を豊富にする」という⁽⁴⁰⁾。今澤は「中間読物」の提供という形で児童と成人の中間にある「青年」層への働きかけを行うことによって、「生涯に互る教育」の連絡をより密なものとしようとしていたと考えられる。

さらに、「中間読物」に関する論において注目されるのは、家庭（親）の果たす役割を重視する姿勢である。今澤は『理論及実際』（1926年）において、従来の「学校と図書館の連絡」に「学校と図書館と家庭の連絡」という新たな項目を付け加えた。ここでは、「学校教師と父兄と図書館員」とが「将に学校を去らんとする児童に対して如何なる図書を推薦すべきか、如何にして之が閲読を奨励すべきか」について「一致協力」すべきことが主張されており⁽⁴¹⁾、青年層への働きかけに親が関わるのが奨励されている。

このように、今澤の児童図書館論は単なる児童に対する働きかけではなく、常に「生涯的教育」の一環を成すものとして捉えられ、「生涯的教育」の主な対象とされていた成人教育との関連を考慮しながら展開されている。今澤は「生涯的教育」という枠組みの中に児童図書館論と成人教育論とを包摂し、「学校と図書館」の連絡を利用して両者を相互に関連付けることで、幼少期から連続的な働きかけを行おうとしていたのである。それでは、このような「生涯的教育」論は市立図書館の実践にどのように生かされようとしていたのだろうか。

第一に挙げられるのは、「読書趣味の涵養」を目指した、児童講演会（お話

会)、著者講演会の開催である。今澤は児童講演会の目的を「読物との連絡を保ち読書欲を惹き起す⁽⁴²⁾」こと、「児童等に読書の習慣を開拓する⁽⁴³⁾」ことと捉えていた。東京市立図書館では今澤の館頭就任以前から時折児童講演会が開催されていたが、今澤の就任後は頻繁に行われるようになる。当時著名な口演童話家を招いた会は1921年から30年までの間に24回開催され、日比谷図書館では毎週土日、深川図書館ではほぼ毎日「オ話ノ会」が開催されていた。今澤は児童講演会の趣旨について「不知不識の間に良書を好み、之に親しましめ、お晰の手段によって児童を立派な読書家に仕立て人生の生涯的教養の基礎を作らしめやう⁽⁴⁴⁾」とすると述べている。この種の講演会は児童を対象としたものだけではなく、成人向けのものも開催されていた。その代表的なものが著者講演会であり、これは「平素閲覧多き図書 of 著者を聘」し、「著者の思想を味」わい「読書趣味を養ふ」ことを目的に毎年開催されていた⁽⁴⁵⁾。この講演会には芥川竜之介や島崎藤村などが招かれ、好評を博している。

第二に挙げられるのは、利用者の好みを考慮した選書である。今澤は当初から図書館側の推薦と利用者の好みとを考慮した「折衷主義⁽⁴⁶⁾」に基づく選書を打ち出していた。今澤には、図書館での実践の中で利用者の好みを考慮する姿勢が生まれ、「どんな気質の子供にも愛読される図書⁽⁴⁷⁾」、「全体として児童が好愛⁽⁴⁸⁾」する図書を選択の第一条件とするようになっている。この姿勢は児童に対してだけではなく、「公衆の希望と必要(希望なくとも奨励すべき図書)とに留意し⁽⁴⁹⁾」にもあるように、成人の選書についても一貫していた⁽⁵⁰⁾。

今澤は利用者の好みを把握するべく、毎年読書調査を実施し、その結果を児童、成人、性別、職業などの視点から細かく分析して館報に掲載している。これは図書館側においては図書目録を作成する際の資料、利用者にとっては一種の読書案内の役割を果たすものであった。さらに成人用の図書目録は1921年以降、児童用図書目録は1922年以降、毎年発行されるが、いずれも利用者に人気の高い図書に図書館側の「推薦」を加味する形式で編纂されている。利用者の好みを考慮する姿勢は、目録の形式にも反映されていたといえよう。

このように、今澤は常に「生涯的教育」の枠組みの中で、読書趣味の涵養

をめざした実践を模索していた。講演会の開催や、利用者の好みを考慮した選書は児童に対しても成人に対しても行われている。このことは、図書館における児童から成人に至るまでの連続的な働きかけが実践されようとしていたことを示しているといえよう。今澤は市立図書館における実践の中で「生涯的教育」論を形成するとともに、この論に基づく実践を展開しようとしていた。もちろんすべての今澤の論が実践されたわけではないが、これらの実践は児童に対する働きかけと成人に対する働きかけを相互に関連させつつ、「生涯的教育」の達成を模索するものである。このことから、今澤の図書館論は、「生涯的教育」を構想するだけでなく、この理念に基づく実践を導く理論であったといえよう。

3. 「生涯的教育」論の目的

それでは、「生涯的教育」の目的とはどのようなものなのだろうか。また、「生涯的教育」によって形成される人間像とは如何なるものなのだろうか。「生涯的教育」を達成するための方法、すなわち「読書趣味」の涵養を目指した児童図書館論や、学校と図書館さらに家庭の「連絡」、児童や成人への働きかけに関する言及と比較すると、「生涯的教育」の目的や人間像に関する言及は非常に少ない。

今澤が図書館における教育の目的について言及しているものを列挙してみると、「一国々民の教育の完成⁽⁵¹⁾」、国民の「知徳の啓発⁽⁵²⁾」、「一般国民の智徳の水準を向上せしむる⁽⁵³⁾」などがある。これらの文言から、今澤が「生涯的教育」論を展開する背景には国家の発展を担う国民形成という目的があったと考えられる。この点について、今澤の社会教育観ならびに図書館における教育の捉え方からも検討してみよう。

今澤は「各国の国民は国家が責任を負ふて何処までも教育しなければならぬ⁽⁵⁴⁾」という議論に基づいて社会教育や図書館における教育の必要性を主張していた。ここでいう教育とは、「社会の成分たるに適する人格を有せしむるに至ること⁽⁵⁵⁾」であり、教育は社会化として理解されている。また、今澤は図書館に「政治及経済的行動に対する穩健なる主義を普及⁽⁵⁶⁾」し、「人々を

して瑣末事より価値ある事に転せしめる手段⁽⁵⁷⁾」としての役割を見出していた。これらの主張から読み取れるのは、今澤は図書館における教育を通じて「政治及経済的行動に対する穏健なる主義」を持ち、既存の「社会の成分たるに適する人格」を有した人間を育成しようとしていたこと、さらに教育における価値基準は教育者側によって決定されるものと捉えていたことである。このことから、今澤が図書館における教育を行う原点には、国家による国民の教育という目的があり、これを前提条件として「生涯的教育」論が展開されたといえよう。

このような目的の設定は今澤の時代制約性ともいえる。しかし、今澤の「生涯的教育」論は社会、国家という枠組みの中で展開され、国家の想定した「価値ある事」を受け容れ、その価値の実現に向けて邁進する人間の育成を念頭に置いていたことに留意する必要がある⁽⁵⁸⁾。今澤の図書館論の特徴として個々人の自発性や趣味能力に応じた働きかけを主張したことが挙げられるが、これは「人間はこれを総体としてみると、多くの場合個人よりは進歩が遅れて⁽⁵⁹⁾」いるという理由からであった。したがって、今澤が個人に対する教育を主張したのはあくまで社会、国家の進歩を促すためであり、たとえこのような働きかけによって何らかの利益がもたらされたとしても「勿論個人の教育に資するものは、すべて社会団体の教育にも役立つのである⁽⁶⁰⁾。」とあるように、その利益は社会、国家の発展に収束していくものとして捉えられていたのである。

今澤は、「生涯的教育」の目的や人間像について殆ど言及していないが、これは今澤の論がこれらのものを欠いていたことを意味するものではない。今澤にとって「生涯的教育」が社会や国家が示した目的の下で展開されるのは半ば自明のことであり、それゆえに敢えて言及する必要はなかったのである。このような性質を持つ今澤の「生涯的教育」論は、容易に国家が示した方向性へと収束していくものであったといえよう⁽⁶¹⁾。

それゆえ、「生涯的教育」においては自発性や個性の養成が重視されていたが、これらは図書館側もしくは教育者側によって予め定められた範囲内に止められる、あるいは方向付けられることになる。このことは今澤の選書論に端的に示されている。

今澤は次第に利用者の好みを考慮した選書を打ち出していくが、児童の選

書について「備付以前に於て十分に注意し、不健全なるものを排却するの方針を取るべし⁽⁶²⁾。」と述べ、成人の選書についても「常に其指導者を以て任じ、其盲従者随伴者ならざること⁽⁶³⁾」としているように、「良書」の基準を判断し、選書を行うのは図書館側であるという姿勢は一貫していた。つまり今澤にとっての選書とは、「どう云ふ本を読めと云ふこと」を予め教えておくことによって「それは読んではいけない」という指導をすることであり⁽⁶⁴⁾、これによって「当初から各人の身心を健かにし、抵抗力を強くし、病気に罹らない工夫」をし、「一国人の心的要素を善導し、耐えざる思想的病菌に侵されないよう」にすることであった⁽⁶⁵⁾。今澤の選書論に即して考えると、「読書趣味の涵養」とは、教育者が示す「良書」の基準に従って被教育者が本を読めるようになることを目指すものであったといえる。

このことから、今澤は教育を通じて伝達される価値は教育者側によって一方的に決定され、さらにそれは絶対的なものであると捉えていたことが分かる。その結果、「生涯的教育」論においては国家によって提示された目的の下で、いかに図書館を機能させていくかということが重要な問題となる。今澤が図書館を定義する際に、「其生涯を通じて(中略)各自の趣味能力に相応し、自由に閲読利用せしめ、彼等自身をして自発的に教育修養せしめ得るところなり。是れ公共図書館の解義にして、同時に其目的なり⁽⁶⁶⁾。(傍点引用者)」としていたことは、「生涯的教育」論において、個々人の趣味や自発性、「個性」に基づく学習そのものが目的化する傾向があったことを意味しているといえよう。

今澤が形成した「生涯的教育」論は、個人の個性や趣味、自発性を尊重するものであった。その一方で、この論は国家や社会が示した目的を無批判に受け容れ、個々人の趣味や個性に基づく個別化した学習をすることそのものが目的となる側面を併せ持っている。それゆえ、「生涯的教育」の方向性は、国家や社会が定めた目的に規定され、容易にファシズムへと回収されていく危険性を孕んでいるともいえるのである。

おわりに

今澤は、図書館を学校教育の補完、もしくは社会教化機関とする位置づけが大勢を占める大正期にあって、教育を「生涯的」スパンで捉え、図書館を自発的な学習を促し、「生涯的教育」の達成に不可欠な教育機関と位置づけている。さらに今澤は、学校教育と図書館のそれぞれの特質を活かしつつ両者を「連絡」させることによって幼少期からの連続的な働きかけを行い、「生涯的教育」の達成を図るという図書館論を展開した。このような意味において、今澤の図書館論は極めて先駆的で独自のものであったといえよう。また、今澤の図書館論は東京市立図書館において実践され、図書館の発展を導いたという点においても評価される。

しかしながら、今澤は社会及び国家の発展を前提として図書館論を展開し、社会や国家が示す目的を無批判に受け容れて、「生涯的教育」を模索するものであった。このことは、今澤の図書館論における「生涯的教育」の目的や人間像についての言及の少なさにも反映されている。

したがって「生涯的教育」論においては如何に図書館を機能させていくかが重要な課題となり、「生涯的教育」の目的や実践の方向性が問われることは殆どなかったといえよう。それゆえ、「生涯的教育」論では、被教育者の自発性を発揮する範囲が予め教育者側に規定され、被教育者は図書館における教育を通じて、教育者側の示した方向へと導かれる構造になっている。このことは、教育者側が学習や教育実践の方向性を一方的に、さらに恣意的に規定することを容認し、被教育者の関心を学習のみに向けさせる要因となる。

今澤の「生涯的教育」論は、学校以外の図書館という場において個々人の趣味や自発性を重視した教育のあり方を構想する一方、図書館を「生涯的教育」機関としていかに機能させるかということに関心を集中させるあまり、実践の中で教育目的を問い直すことはなかった。このような意味において、「生涯的教育」論は大正期の教育について指摘されてきた問題を明確に示しているといえよう。

しかしながら、実践の中で教育目的を捉え返すことなく、学習することそのものが目的となるという問題は、今澤が論を展開した時代の制約性のみに

よって説明されるものではなく、現代においても起こりうるものである。教育論は、教育実践と教育目的とを媒介することによって、実践を取り巻く枠組みや目的を相対化するという役割を担っている。それゆえ、教育論は教育目的や理念に適う実践を導くことができるか否かによってその真価が問われるといえよう。なぜなら、教育目的を無批判に受け容れた時、教育実践はその妥当性を問わないままに、如何なる教育目的にも従属していく危険性を孕んでいるからである。

今沢の「生涯的教育」論の検討を通じて示されたのは、図書館が生涯的教育機関としてどのように機能していくべきかを問うだけでは不十分ということである。教育論は、常に教育の目的や方向性を問い、この過程を経て実践のあり方を模索するものでなければならない。この意味において「生涯的教育」論が内包する問題は、極めて現代的な問題提起をしているともいえるのである。

<注>

- (1) 細谷重義・慈関野真吉編「今沢慈海著作年表(稿)」『ひびや』第130号, 1980年, 72-81頁
- (2) 赤星隆子「今沢慈海の児童図書館論—英米文献との関係を軸とした—考察—」『図書館学会年報』第36巻第4号, 1990年, 167頁
- (3) 以上, 前掲(2), 167頁及び180頁参照
- (4) 東京都立日比谷図書館『五十年紀要』1959年, 25頁
- (5) 細谷重義「東京市立図書館の変遷—日比谷の創立から現代まで—」『ひびや』第4号, 1958年, 4頁
- (6) 同上
- (7) 久保義三ほか編著『現代教育史事典』東京書籍, 2001年, 431頁
- (8) 同上
- (9) 佐藤政孝『東京の図書館百年の歩み』泰流社, 1996年, 126-127頁
- (10) 日本図書館協会『図書館小識』1915年, 3頁 尚, 本稿での引用は出来る限り新字体に改めた。
- (11) 前掲(10), 3-5頁
- (12) 前掲(10), 67頁
- (13) 今沢慈海「公共図書館の使命と其達成—人生に於ける公共図書館の意義—」『図

220 研究ノート

書館雑誌』第43号，1920年，2頁

- (14) 以上，前掲(13)，2頁参照
- (15) 前掲(13)，3-6頁参照
- (16) 今澤慈海「公共図書館は公衆の大学なり」『其事業』第1号，1921年，2-3頁参照
- (17) 今澤慈海「読書趣味の養成と師範学校」『其事業』第13号，1923年，2頁
- (18) 今澤慈海「成人教育と図書館」『其事業』第30号，1925年，3頁
- (19) 同上
- (20) 今澤慈海「図書館及通俗読み物」『社会教育講演集』文部省普通学務局編，1921年，1-11頁参照
- (21) 今澤慈海「都市に於ける教育の中心としての図書館」『社会教育』第2巻第11号，26頁
- (22) 前掲(13)，2頁
- (23) 前掲(21)に同じ
- (24) 前掲(13)，2頁
- (25) 前掲(21)，26頁参照
- (26) 今澤慈海『図書館経営の理論及實際』叢文閣，1926年，490頁
- (27) 同上
- (28) 前掲(21)，26頁
- (29) 前掲(13)，2頁
- (30) 今澤慈海「児童と図書館」『図書館雑誌』第16号，1912年，11頁
- (31) 前掲(10)，73-74頁
- (32) 前掲(13)，4頁
- (33) 以上前掲(21)，18頁
- (34) 前掲(16)，3頁
- (35) 前掲(26)，490-491頁
- (36) 今澤は明確に「青年」を定義していないが，市立図書館では中学校女学校三年以上に該当する者が成人部の図書利用を許可されていたこと，さらに欧米の青年に対する働きかけは大体14歳から18歳までを対象とすると紹介していることから，この範囲に該当する者を「青年」，これ以下を「児童」，これ以上を「成人」としていたと考えられる。
- (37) 今澤慈海「図書選択と思想問題」『図書館学講座』第2巻，図書館事業研究会，1928年，9頁
- (38) 今澤慈海「中間集書に就て」『東京市立図書館と其事業』第57号，1930年，2頁

- (39) 同上
- (40) 今澤慈海「読書の功罪」『東京市立図書館と其事業』第58号, 1930年, 2-3頁
- (41) 前掲(26), 578頁
- (42) 今澤慈海「児童と図書館」『都市教育』第99号, 1912年, 28頁
- (43) 前掲(26), 508-509頁
- (44) 東京市立日比谷図書館『東京市立図書館一覧 大正十五年』1926年, 18頁
- (45) 同上
- (46) 前掲(30), 9頁
- (47) 今澤慈海・竹貫直人『児童図書館の研究』博文館, 1918年, 96頁
- (48) 前掲(26), 528頁
- (49) 前掲(26), 181頁
- (50) 今澤は「読書力読書趣味の増進と云ふことのみに着眼して図書を選択」した場合, 「仮令其選択が骨折苦心の結果なりとも, 此等の図書中には読者に顧られざるものが多」い(前掲(26), 182頁)と指摘する。
- (51) 前掲(10), 5頁
- (52) 前掲(10), 67頁
- (53) 前掲(26), 491頁
- (54) 前掲(20), 3頁
- (55) 今澤慈海「市民生活の要素としての図書館」『図書館雑誌』第58巻, 1924年, 36頁
- (56) 前掲(10), 10頁
- (57) 前掲(21), 20頁
- (58) 今澤は, 図書の選択について「腹の出来た人, 頭の豊かな人」には「図書の選択などは, 或点までは不必要」であるが, 「中人以下についてはよく心すべきこと」と述べている(今澤慈海「家庭と読書」社会教育協会編『婦人講座』第6編, 1930年, 18頁)。このように, 「中人以下」の人々に対して「よく心」して選書を行うべきであるという主張には, 今澤が選書を通じて一種の思想善導を行おうとしていたことが表れている。今澤は「中人以下」の人々を対象とした選書による思想善導を通して, 既存の社会及び国家の体制の維持と発展を図ったといえよう。
- (59) 前掲(21), 28頁
- (60) 前掲(21), 29頁
- (61) ファシズム期になると今澤は「我国図書館の究極の目的は皇国究極の理想そのものである」としている。この論考の時代制約性を考慮した上で, 図書館の目的と国家目的とが同一視されていたことに留意する必要がある。(今澤慈海「図書館

222 研究ノート

員養成問題漫語」『図書館雑誌』第35卷第9号，1941年，18頁)

- (62) 前掲(10)，82-83頁
- (63) 前掲(26)，181頁
- (64) 前掲(20)，22-23頁
- (65) 前掲(37)，8-9頁
- (66) 前掲(13)，3頁